

続あやめ漫談 『見立て』

相模原市 清水 弘

[続あやめ漫談について]

以前の会報に「あやめ漫談」なる投稿を続けていたが、それはハナショウブを含むアヤメ属植物を身近な原種から順に、皆さんへ紹介するためのものであった。その後、「世界のアイリス」という本を当協会で出版することになり、私が北半球に分布するアヤメ属植物を地球儀の西回り、日本、韓国、中国→中央アジア→中近東→欧州→北米といった順番に従いその中で解説したことで、当初に意図した「あやめ漫談」を一気に書きあげてしまったという状態になった。そこで「あやめ漫談」なるシリーズを一先ず休止したのだが、そうしている内に私の関心は他の方面に移って行った。殊に40年近く実生畑に立って新花の選抜を繰り返す内に、「何故に自分はこのような色彩や形の花を選ぶのだろうか?」、「こういう選抜感性は一体、何処から来ているのだろうか?」というような疑問が頭から離れなくなって行った。この疑問解決のためには、花菖蒲と日本人の精神世界との関係を掘り下げて行けば、何某かの答えが出てくるのではないかと考えて今も追い求め続けている。そのような思索の中から気が付いた点を「続あやめ漫談」として数回に亘って紹介して行こうと思う。

さて、現代に語られている花菖蒲文化についての記述は、何れも富野耕治先生が調査・報告した内容の範囲に留まっているが、それは客觀性のある新しい歴史資料が発見されていないことにも関係している。この壁を破るには「遠野物語」を書いた柳田国男の手法が参考になるのではないだろうか。彼はそれまで文献に記録されなかった各地に残る伝承を集めて、日本人の本質に迫って行く民俗学というものを確立した。彼は自分の感性を研ぎ澄ませて、収集した情報の中からより根源的な日本人のものの見方、考え方を推定するという手法で臨んでいる。これに準じて「花に対する自分自身の感性を中心く美術、工芸や民俗学、人類学等の別な分野からの情報に照らして花菖蒲文化というも

のを見つめ直して行く。」というやり方があるのではないかという考えに至った。

その際には柳田と同様に抽象的思考が重要で、「五感を通じて神経系に入力された生の情報を抽象的な概念に置きかえる。」という過程が必要となる。この試みが後世になって社会的な支持を受けるか、それとも単なる個人の観念の遊戯で終わってしまうか判らないが、取敢えずは会報に記録を留めて皆さんの批判に預かろうと思う。

[見立ての技法]

私達は、「我国に自生しているノハナショウブが基になり、日本各地で品種改良がなされて現在ある江戸系、肥後系、伊勢系、長井系が成立した。」というような話を先輩方が書いた書物から教えられ、花菖蒲園の看板にもそのように解説されている。この改良の原動力となつたものは、私達の心の中にある美意識である。元々、ノハナショウブの花は昆虫に受精を助けてもらうための生殖器官であったものが、人間の側がその花を美しいと感じ、もっと立派にもっと派手にという願いを込めて一種の装飾を加えた行為が品種改良であった。「花を私達の身の周りを飾る一種の装飾品」とした行為は、洋の東西を問わず行われたが、我国の花卉改良には自然主義に立脚した『見立て』という美意識が強く働いているようだ。

『見立て』というのは、ある形を別な形になぞらえるという一種の芸術表現である。米国でも花菖蒲の一品種にホワイトパラシュート、六英咲のシベリアアヤメにヘリコプターというような名前が付けられたりしているので、彼らにもこの『見立て』の意識が働いていることが判る。しかしながら、我国の場合は人工物ではなく花鳥風月の自然美を模した点が際立っている。日本人は昔から美しい自然の形に憧れ、これを生活圏の中に再現しようとしたようで、その最たるもののが日本庭園や茶室の表現だが、同じ美意識は花菖蒲の改良にも強く反映されてい

る。

そもそもノハナショウブのある地域ではトントン花とかドンド花とか呼ぶが、この名は勢いよく流れて行く水音の擬音に由来する。これはノハナショウブの生態を端的に示した言葉であり、まずは日本の自然の存在が見えてくる。浅鉢盆養作りという栽培兼観賞法は、自然に溶け込んだ花菖蒲園の田園風景を一寸足らずの鉢植えに見立てたものである。続いて江戸系には「玉宝蓮」や「竜の爪」、「筑羽根」等の素朴で直接的な見立て名が見られるが、これらの品種の花型は正常というより一種の奇形である。自然との調和に根ざした命名意識なのであろう。



江戸古花 「筑羽根」（戸塚由美子撮影）

この意識が心の内面に大きく流れ込むと、肥後系の品種改良の在り方となって表現されてくる。肥後藩が奨励した儒教教育を受けた人々は、花菖蒲の花の中心にある雌しべを人間の心に見立てて「芯」と呼び、心が大きく立派であれという理想に向かって挙って改良した結果、巨大な雌しべをもつ花型が完成したのである。伊勢系はというと、どうやら嘗ての伊勢地方に置かれた斎王制度下の麻織物や江戸時代に盛んに栽培された綿花などの紡績産業に関係があるようだ。伊勢花菖蒲にある蜘蛛手には、綿花 자체のもつ纖細な特性が投影しているし、花弁に見られる縮緬は、庶民にとって高値の花であった縮緬地の絹織物への往時の憧れが滲み出ている。さらに伊勢三花に共通した下垂性は、桜や梅などに見られる枝垂れ性と同様に、私達の情緒的な気分を呼び起こしてくれる。本来の植物

の芽は太陽に向って先へ先へと伸びて緊張感のある機能美を持っているものだが、それとは真逆なアーチするという特性は、私達の心を安堵させるという情緒を顕している。伊勢三花に見られるこれらの表象は、嘗てここに生きた人々の精神の心象であり、深層意識下での見立ての結果なのだろう。

[見立ての由来]

この『見立て』という意識は、古代日本人が先ず大陸からの輸入した文物を、日本在来のもので代用ようとした伝統の表れでないかという人がいる。確かに平和な島国であった時代に日本独自の花文化が生まれ、「花菖蒲の姿は私達の心の反映であり、花の美しさは花自体ではなく実は私達の心の中にある。」と、つい内省してしまう現代日本人の心情からしても頷きたい話ではある。だが、欧米人にも同じような発想があるわけだから、むしろ『見立て』という精神の働きは人類が各人種に分化する以前に培われたものではないかと思う。十数万年前にアフリカで誕生した人類の一部がアフリカを出て、アラビア半島から種々のルートを辿って全世界に広がったわけだが、その人類が見知らぬ土地での食糧調達の際、眼前にある動植物や魚介類が食べられるかどうかを、五感を使って判断するという人類共通の情報処理能力が根本のところで『見立て』と関係しているのではないだろうか。ただ、我が国の場合八百万の神(古神道)が今でも息衝き、自然との優れた共生の道を指し示してくれるという自然主義の感性を色濃く残していることが大きな特徴に違いない。序ながら『見立ての技法』は、我々の将来の生活にとっても有用である。例えば使い捨て刃のカッターナイフの発明は板チョコがモデルになっている。今回は『見立て』という観点から花菖蒲文化について考えて見た。このような見方で花菖蒲の世界を眺めると見立てのオンパレードとなっているが、花菖蒲に現れた色彩や形というものは、土地の自然環境や文化を背景にもつ多面的なものとしてとらえなくてならないことの一例を語ったつもりである。